

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

ハルク (HULK)

配給/UIP

2003 (平成15) 年8月10日鑑賞

Data

監督: アン・リー

出演: エリック・バナ/ジェニファー・コネリー/ニック・ノルティ

👁️👁️ みどころ

ハルク (巨人) は、アメリカン・コミック誌の「ヒーロー」だが、その出生には「原爆実験」、「放射能」、「突然変異」という「負の遺産」を背負っている。これは日本が生んだ怪獣「ゴジラ」と同じだが、ハルクは人間が変身するものだから、人間味タップリ。緊張感とリアリティのある前半のストーリー展開から、後半は突然「ハルク」のマンガ性が突出……。でもまあ仕方ないか。楽しみ方はいろいろだろうから……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<原作はアメリカン・コミック>

ハルク (HULK) は、「巨人」と訳されているが、「うすらでかい、やっかいなもの」という意味がある。ハルクは今から40年前の1962年、アメリカ最大のマーヴェル・コミックス社のコミック誌に登場したキャラクター。次第にそのキャラクターが注目されて一冊の本を独占するようになり、人気沸騰。いったんは終了したもののすぐにシリーズになってよみがえり、現在も出版が続いている人気作品とのこと。またその人気のおかげでテレビにも登場し、多くのシリーズを生んでいる。だからアメリカ人の中では、ハルクは多くの人たちに認知されたキャラクターというわけだ。

<コミック誌のヒーローが映画でも大人気>

最近、アメリカのコミック誌の「ヒーロー」たちが続々と映画に登場し、ヒットするケースが多い。『X-MEN』、『スパイダーマン』、『デアデビル』、そして今回の『ハルク』だ。特に、『スパイダーマン』は2002年の興業成績トップを誇っている。

「ハルク」のパンフレットには、「原子力時代が生んだ怪力無双のキャラクター『ハルク』、

堀 三保 (SF 研究者)」というタイトルで、面白い分析が載っている。すなわち、彼ら (?) マーヴェル社のヒーローたちは、アメリカン・コミック界の一方の雄である DC コミックスのスーパーヒーローである「スーパーマン」や「バットマン」などと違い、すべて「原爆実験」、「放射能」、「突然変異」等の洗礼を浴びて生まれているが、これは 1960 年代の米ソ冷戦構造の緊張関係の中で生まれたものだということ。従ってこの映画の主人公ハルクは、原子力時代の新たな「フランケンシュタイン」であり、「ジキル博士とハイド氏」であり、「キングコング」である、というのだ。私はこの分析は非常に正確だと思うし、興味深い。

<日本が生んだ怪獣ゴジラ>

ここで私が思い出すのは、日本が生んだ怪獣「ゴジラ」だ。巨人からヤンキースに移籍したプロ野球の松井秀喜選手が「ゴジラ松井」というニックネームで呼ばれるほど、今やゴジラは「世界ブランド」になっている。しかしゴジラはもともと日本生まれの怪獣。すなわちそのルーツは、1954 (昭和29) 年に東宝で製作され、戦後の日本映画界に特撮怪獣映画というジャンルを築いた記念すべき映画『ゴジラ』だ。監督は本多猪四郎だが、ゴジラの特撮で一躍有名になったのは、円谷英二。「東宝の特撮映画の不滅の金字塔」とされている。1949 (昭和24) 年生まれの私のはじめてこれを観たのは小学生の時だったか・・・。

<アン・リー監督の視点は?>

『ハルク』の監督をしたのは、『グリーン・デスティニー』(2000年) で、最優秀外国語映画賞などアカデミー賞4部門を受賞した台湾出身のアン・リー。もちろん彼は子供時代に、アメコミ誌を読んで育ったわけではないから、この映画を監督する段階になって「ハルク」を研究したことになる。

なぜ台湾出身の監督が・・・? と疑問が湧くが、膨大なストーリーを1本の映画にまとめるについては、予備知識をもたない監督の方がベターなのかもしれない。現に、この映画でのハルクの顔立ちや性格そして「肉体条件」等は、原作とはかなり異なったものになっているらしい。たとえばCGでつくられた「緑色の怪物」ハルクの顔立ちは、より人間らしい優しいものになっているとのこと。

<リアリティのあるサイエンス物語>

映画が始まるとたちまち緊張感が走る。字幕の流れと共に実験室での実験の様子が次々と写し出される。そして実験の対象はクラゲ、ヒトデからトカゲ、猿へと次第に人間に近づいていく。この実験に執念を燃やすのはデヴィッド・バナー (ニック・ノルティ)。「生体実験」はもちろん禁じられているが、科学者にはその誘惑が付きものだ。「成功間違いな

し」との確信をもった科学者はその誘惑にかられ、我が身自身あるいは我が息子をその実験台にしてしまう。これは多くの物語に共通するものだ。

ニックは自分の研究成果を示すため、愛する妻との間に生まれた可愛い男の子に注射液を注ぎ込んでいたが、失敗だったと分かり、今はその対処方法を模索していた。ところがそんな中、ニックが生体実験をしていたことが発覚し、ニックはすべての研究からはざされてしまった。これでは、息子を実験台として研究していた研究の失敗を取り返すことができない！そこでニックがたどりついた結論は・・・？研究室を破壊した上、ニックはそれを妻に納得させようとしたが・・・。

そして約20年の月日が流れた。今やニックの息子ブルース・バナー（エリック・バナ）は、優秀な父親の遺伝子を受け継ぎ、立派な科学者となって、父親と同じ研究を続ける毎日だ。エリックの研究のパートナーはベティ・ロス（ジェニファー・コネリー）。これらの研究内容の描写は非常にリアルで、これから一体何が起ころのだろうかという不安と期待感をもたせるに十分な緊張感がある。



＜ハルクのリアルさとマンガ性＞

ある日突然、実験室内でアクシデント。そこからハルクが登場する。ハルクはブルースの「分身」だ。その登場の仕方も結構リアルで迫力がある。そして実験室を壊し、ベティを助けるため、デヴィッドが作った犬の化け物と闘うシーンまでは、リアリティを保っている。しかし、ハルクを鎮王するために出動した軍隊や戦車、ヘリ、戦闘機との「闘い」になると、突然「マンガ」になってしまう。スーパーマンの能力は〇〇、ゴジラの能力は△△と、事前にその能力データがある程度頭に入っている場合は、その荒唐無稽な闘いぶ

りにも納得できるが、「ハルク」の場合はその基礎データについての知識がない。だから、突然あたかも空を飛ぶように何キロもジャンプしたり、ミサイルの弾丸を受けても破壊されなかったりすると、あまりにも突飛な感じ。

もともと、後からパンフレットを読むと、ハルクの肉体能力の基礎データが載っている。身長210cm、体重450kgという初期設定だが、怒りの感情が増幅されるたびにその身体は大きくなり、またパワーもアップされる。ハルクの1回の跳躍力は3マイル（約5km）とのこと。しかし巨人なハルクが、ピョン、ピョンと空を跳んで移動したり、戦闘機の追及をかわしていく姿はちょっとマンガチック・・・。

<最後のオチ?はちょっと・・・>

世を騒がせたハルクも、遂にジ・エンド。その1年後。ベティも今や落ち着きをとりもどし、ハルクを鎮王させた父親との関係も修復している。そんな中、突然スクリーンはワケのわからないゲリラの活動する山岳地帯のシーンに。

そして、そこに立っているのは髭を伸ばしたブルース。

これを尋問(?)する兵士に対して、ブルースは「俺を怒らせるな!俺を怒らせると怖いことになるぞ!」と説明(桐喝?)。

コリャー—体何だ?パートIIへの伏線か・・・?

こんなオチ(?)はいらないよ!

2003(平成15)年8月11日記